

西鶴研究は戦後三十余年の間に長足の進歩発展を見た。基礎的な資料の調査・整備も大いに進み、注釈、周辺作者の調査も大いに面目を改めた。しかし西鶴の個々の作品の評価、更には西鶴の全体像についても、研究が進むにつれ、研究個々の間の跛行的な現象、偏一するところを知らぬ判断・評価のゆれが目につく。ある意味では現在では西鶴研究の混沌期、次の跳躍への準備期ともいえるかもしれない。その時研究者各人の西鶴評価を確かめる規準の役を『西鶴評論と研究』は今も果しているのではなからうか。

『西鶴評論と研究』の評価に同意し、あるいは自己のそれとの距離をはかる事によって、各人の西鶴像はゆれを伴いながらも次第に脱皮を遂げて行く。三十年代・四十年代もそうであったと思うが、現在においてもそういう意味で『西鶴評論と研究』は博士の絶版の御意向にかかわらず生き続けているのではあるまいか。それなら『西鶴評論と研究』と基本的な姿勢を同じくし、その訂補を志されたという『西鶴新論』の今日における意義も自から明かなものがあるう。

(昭和56・10 中央公論社刊 A5判 四三八頁 六五〇〇円)

伴悦著『岩野泡鳴』——

「五部作」の世界——

岡 本 卓 治

前著『岩野泡鳴論』（昭52・11、双文社出版）の「あとがき」

で、伴氏は「泡鳴の個人主義的国家主義が、表象主義的自然主義文学と溶けあって創造的世界を展開した最大の作品五部作についても、試論でおわらざるをえなかったのは心のこりである。今後この試論の上に、初出と改訂の本格的な異同調査を手がかりにして、総合的に分析、集成を試みたい」との宿題を自身に課しておられた。それから四年あまりの研鑽をみごとに実らせて課題に答えられたのが本書である。その間の氏の研究者としての篤実な歩みには頭の下がる思いがする。

しかし本書は決してこの四年間で成ったものではない。たとえば本書の掉尾を飾る「校異——『断橋』『憑き物』『発展』の初出と改訂との主なる異同——」にしてからが、ここにこうして整理されるようになるまでに、二十年近くの歳月が費されていることを私は知っている。その間の労苦がどのようなものであったか、氏は当然のことのようにして具体的には何も語らない。その出来栄えがたとえ完全なものではないとしても、ここに提出された校異のおかげでこれからのわれわれは、あの複雑な形成過程をたどった五部作の創作現場にこれまでより数歩踏み込んだところで作品を読むことができるようになったわけである。泡鳴研究史の上からは、これは一つの転機を画した華といえるだろう。ここでついでにいささかあつかましい注文をしておけば、氏にはいづれかの機会をとらえ、「校本五部作」の刊行を図っていただくようお願いしたい。こんにちではいちばん手近新潮文庫版さえないかなか入手し難いものになっており、一般の読者はもちろん若い研究者などにとっても「五部作」そのものが縁遠い作品になってしま

っている状況があるからである。

紹介が前後してしまつたが、本書は次のような構成になつてゐる。

「泡鳴五部作」の成立過程

放浪——「放浪」を作つた実感と所信と」の関係

断橋——北海道巡歴の意味

憑き物——「門」「行人」「ころ」(漱石)との対比

発展——「生」(花袋)、「家」(藤村)との対比

毒薬を飲む女——「五部作」は果して私小説か

これに加えて「岩野泡鳴年譜」「五部作参考文献」および先述の「校異」と「あとがき」によって本書全体は成り立っている。

もつぱら「五部作」に焦点を絞つて書き下された本論部分は、直接的には、泡鳴の生活と文学の総体を把握しようとする営為のすえに編まれた前著からの所産であるが、また逆に、前著は本書で五部作論を結実させるための基礎作業であつたとも言ひ得る。今にして思えば前著は本書での集中のための拡散でもあつたのであり、氏の研究のこうした展開は、泡鳴その人の生活および文学の全体と五部作との関係にひそかに対応し合っているはずである。その点で氏はその研究態度と方法においてきわめて自覚的であつたように思われる。と言うより、自己の研究態度や方法について絶えず検証し続けることなしには、泡鳴に対する一貫した関心や興味は持続されないうべきかもしれない。泡鳴という文学者はことさらに研究者自身の自覚の強化を必要とする存在だといふことである。

古来、泡鳴を論じ來つた者たちが共通して指摘するのはその思想の飛躍と独断に満ちた展開についてである。それは、泡鳴をもつて「偉大なる馬鹿」「愚鈍」と評した大杉栄以来の伝統であるかのような観すら呈している。これまでの多くの論者は、あたかも申し合わせたように、飛躍と独断のゆえをもつて泡鳴の思想を切り捨て、にもかかわらずその生活と文学には端倪すべからざるものがある、というように自家の論を展開してきた。ここに泡鳴研究における大きな落とし穴と障礙がある。つまり、その思想を切り捨ててしまつたら泡鳴の生活と文学そのものが成り立たなくなるのは見やすい道理なのだが、しかしその思想の飛躍と独断のあまりにも露わなように、論者たる者はついたじろいであり、その生活と文学のみを拾いあげようとするジレンマに陥つてしまつたのである。

泡鳴の生活と文学とがまぎれもなくその思想の産物であることをみごとに論じ切つたのは、石川淳の戦争下における文章であつたと思うが、ひるがえつて大杉栄の論も、泡鳴の思想に対する真つ向からの批判なのであつた。その点については伴氏は前著において、「岩野泡鳴と大杉栄」と題する章の中で克明に論じておられる。これは前著中における白眉の一編と称してもよい文章だと私は思っている。

伴氏が本書のための基礎の一つとして取り組まれたことは、泡鳴の思想の解きはぐしとその再構成という、推測をたくましくすれば、かなりの徒労感にさいなまれたであらう、困難に満ちた仕事であつた。研究者自身の自覚の強化を私が云々したゆえんであ

る。その自覚の内容については氏は「あとがき」で次のように要約しておられる。

「五部作」が私に与える感動がなんであるかを、自分の内部でたしかめるために、泡鳴が「個人主義的国家主義」と「自然主義的表象主義」を、いかに統一的に形象化しようとしたか、否かを探索することであった。この二つのものの発生基盤は、心熱、熱想的自覚の世界であった。が、「五部作」形象化の過程で、重要な因子として介在した「幻影」との関連について、とくに意を注いでみた。

ここに示された氏の泡鳴観は、すでに前著中において把握されていたものであり、それをもって五部作を読み解く鍵としている。五部作を泡鳴の思想の産物として把握、その思想をもって作品を解明しようとしたわけであるが、特徴的なことは、その思想を解きほぐすときに氏が極力、外在的な概念を排除しようとしていることである。これは本書での特徴というより、前著からの一貫した姿勢だと思うが、泡鳴をして泡鳴を語らせようとする態度だと言ってもよい。それは研究者ならば当然の態度とも言えるが、泡鳴の場合には、前述のような困難さがつきまといっているため、氏がそのような態度を貫くには研究者としての節度の問題を越えた多大な忍耐が必要であつただろう。その点で本書は小さかしい裁断批評などのどこにも見あたらぬ、着実な内容になっているのだが、反面、この態度は研究主体の自立性を保ちつつどこまで対象の内部に深く立ち入ることができるかという点に問題解明

の成否がかかってくるわけで、とりあげる問題によっては解明度の深浅が異ってくることがある。

「個人主義的国家主義」や「自然主義的表象主義」の問題については、氏の理解の深さと広さはさすがと思わされるのだが、「幻影」の問題については、その由来の説明や五部作中での当該場面の指摘に過不足はないものの、それが作品の「形象化の過程で」どのように「重要な因子」として機能しているのか、その点の解明に不満を感じずにはおれなかった。その解明には、私の憶測を加えれば、泡鳴の自然観の特徴を明らかにすることが不可欠になることと思う。その問題については氏は「放浪」を論じた章で部分的にとりあげているが、そこでは「幻影」についての言及はない。また、「断橋」の章では、「釣り橋の場面」での幻影にふれつつも自然についての考察はなされていない。

しかし、これらのことは氏の次の仕事に対する私の期待につながるものではあるが、本書の欠点とは考えない。本書はその目次からもわかるように、五部作の成立過程をあとづけつつその創作現場に数歩踏み込もうとした労作である。しかし、遂には未完に終った五部作叢書は、最初の構想とも大きく異っており、事件進展の順序によって再編成されることもなかった。ではあり得た「五部作の世界」とはどのようなものなのか。氏においても探究解明の旅はいま、その端緒を開いたというべきだろう。

(昭57・3 明治書院 B6判 二〇三頁 二四〇〇円)